

# 谷川俊太郎とウィリアム・オールドの「出会い」と「共鳴」 ～そして、詩を翻訳する〈不可能性〉について～

白井 裕之

## 1. はじめに

文学のジャンルにはいろいろあるが、その中でも詩は翻訳が難しいものと思われている。詩の翻訳は不可能だ、といわれることさえある。しかしこれは極論であって、困難な中でも人々は詩の翻訳を試みてきた。ここでは谷川俊太郎の詩をエスペラントに翻訳したものを例にとり、詩を翻訳することの〈不可能性〉、あるいは困難性について考えてみたい。谷川作品のエスペラント訳を採り上げるのはかなりの程度、客観的な要因による選択というより筆者の個人的な要因による要素が強い。そこでまず、この点について説明しておきたい。

筆者は2007年8月、横浜で開催された第92回世界エスペラント大会<sup>1</sup>の際、公開イベント「朗読の夕べ：エスペラントの詩×日本の詩」の企画を担当し、日本の詩人としては谷川氏に出演を依頼した。幸い快諾を得たが、谷川氏が朗読を希望されたご自身の作品（「しぬまえにおじいさんのいったこと」、「ふくらはぎ」、「なんでもおまんこ」）にはエスペラント訳がなかったので、エスペラント文学に造詣が深く、また自らも日本語で詩集<sup>2</sup>を刊行している泉幸男氏に翻訳を依頼した。

この「朗読の夕べ」は、同年8月5日の午後4時から6時、横浜市中区のZAIMで開催された<sup>3</sup>。出演者は谷川氏、ハンガリー出身でルクセンブルグ在住のエスペラント詩人イシュトヴァン・エルティル氏、そしてクロアチアのエスペラント作家スポメンカ・シュティメツ氏であった<sup>4</sup>。泉氏と、やはりエスペラントやその文学に詳しい北川久氏、そして筆者が日本語とエスペラントの間の逐次通訳を行い、筆者はまた司会進行も受け持った。第一部が詩の朗読で、すべての詩が日エス二言語で読み上げられ、第二部ではエスペラントやその詩について議論が交わされた。聴衆は200名を超えた。

本稿では、まず「朗読の夕べ」が実現するに至った背景として、谷川氏とエスペラント詩人の「出会い」と「共鳴」について述べ、続いて当日朗読された谷川の作品のうち、特に原文と翻訳が興味深い対照をみせている「なんでもおまんこ」に焦点を当て、詩の〈翻訳不可能性〉とはどういうことかについて考察する。なお、以下では敬称・敬語を一律に略していることをお断りしておく。

## 2. エスペラントにおける文学の存在

日本語の詩を代表する人物として谷川に出演を依頼したことについては、あまり異論の余地はなさそうである。実際にその作品がどの程度読まれているかはともかく、谷川は現代日本を代表する詩人の一人として知られているからだ。むしろ世上の感覚からすれば異論がありえるのは、谷川の向こうをはるエスペラントの詩人の方であろう。というのもエスペラントが、1887年に母語の違う人たちを橋渡しす

るために発表された言語であるため、そのような言語でまともな詩を書いている詩人が本当にいるのか、という疑いが予想されるのである。エスペラントは「人工語」と称されることが多く<sup>5</sup>、そこから「人工語では文学は書けない」と断定されることが少なくなかったのだ。

ところが実際には、このような偏見に抗するためもあって、エスペラントではかなりの量の文学作品が著されてきた。民族文学の名作がエスペラント訳されたばかりでなく、エスペラントで直接小説や詩を書き下ろすことも行われてきたのである<sup>6</sup>（エスペラントで直接、詩を書いた最初の人物がその創案者ザメンホフ自身であり、しかもそれが、まだエスペラントの発表される前であったことは注目に値する）。当初はたいした文学的価値のない作品も多かったが、次第に質の高いものが書かれるようになっていった。そのような蓄積があればこそ、例えば1993年にはエスペラントの作家団体（エスペラント・ペンセンター）が国際ペンクラブに加盟を認められ<sup>7</sup>、また1998年を皮切りに数回、エスペラントの詩人がノーベル文学賞の候補に推薦されることになったのである<sup>8</sup>。

ノーベル文学賞候補になったのは、ウィリアム・オールドというスコットランドの詩人であった。オールドはエジンバラ郊外で中学校の教師をしながら、エスペラントで詩や評論を書き、また翻訳を行ってきた人物である<sup>9</sup>。当初はエスペラントと英語の両方で創作活動をしていたが、1950年前後にエスペラントで書くことを自ら選び取った<sup>10</sup>。そしてそれ以降は、もっぱらエスペラントを創作言語として生涯を過ごしたのである。筆者は2003年頃からオールドの詩をいくつか日本語に訳していたが、この訳稿が谷川の目に留まったことが、「朗読の夕べ」が実現するための伏線となった。そのとき、谷川は世間の「人工語では文学は書けない」という先入観にとらわれず、一人の「同僚＝詩人」としてオールドに「出会った」といえるだろう。そこで次章では、谷川がどのようにオールドを発見し、その作品を読んだのかについて述べたいと思う。

### 3. 谷川とオールドの「出会い」と「共鳴」

この章では、谷川がオールドにどのように「出会った」のか、そしてどのように「共鳴」したのか、具体的にみておきたい。谷川がオールドを発見した経緯は、言語の違う詩人同士が「出会う」一つの事例とみることができるだろう。

#### 3. 1 谷川とオールドの「出会い」

谷川がオールドに「出会った」経緯は、『詩の雑誌midnight press』2005年秋号に掲載された鼎談「超えていくことば（たち）」で知ることができる。この鼎談は毎回、谷川とやはり詩人の正津勉の二人がゲストを迎えて、会話を展開するものであった。この回のゲストだった山本真弓から、オールドの詩“Ebrio”の拙訳（日本語訳の題名は「酔っぱらい」）を示された谷川は、「おもしろい。（…）深い詩じゃないですよ。だけどすごくユーモラスだし、言語的な実験がありますよね」<sup>11</sup>と感想を述べている。この詩は、文字どおり酒場で酔っぱらいがクダを巻き、酔いつぶれていくさまを、呂律がまわらなくなっていく様子の言語的模写によって表現したものである。後に述べる翻訳の〈不可能性〉との関連でいえば、この作品は言語によって著しい多様性をみせる擬音語を多用しているので、その意味では翻訳が困難であるといえよう。しかしそれは、原文に対応する擬音語を探すのが大変だということ、酒を飲んで酔っぱらうということは、たとえ文化によって飲酒に対して禁忌があるにしても、人間に共通しているのだから、ある意味では言語を超えた普遍的な体験を描いているといえる。

この詩は、酒場の片隅にいる女に絡み、酔っ払ってクダを巻いた男が嘔吐するところで終わるのだが、そのくだりの拙訳は次のとおりである<sup>12</sup>。

きれいなねえちゃん あんたが好きだ  
まったくあんたに首っ丈  
やわ肌  
触れ  
おまえを愛撫  
ああ あわよくばお床入り  
灰色をした現実を  
すっかり忘れてしまうため  
ちっかりかすれてちまうため  
ちまうたみ  
おりゃ ちらん  
あんなあま  
あ あ あまっちょ  
ちょ ちょ  
ちょっと  
ちょ ちょいれ  
どこですか  
ど ども どうも すんません  
あ あんがとね  
いや だいじょうぶ オレよっちゃない  
ぢゃ ども  
ども どオも  
ども  
ども  
いつとき  
いきそう

この部分のエスペラント原文は以下のとおりである。酔っ払って呂律が回らなくなっていくのを表現する語形の微妙な変化（たとえば、*dako danto danko dankon*）と韻を踏んだ語尾に注目していただきたい<sup>13</sup>。

mi vin amas, bela ino,  
mi adoras vin sen limo,  
volas tuŝi,  
kune kuŝi,

kaj karesi,  
 kaj forgesi,  
 pri la griza ver' forgesi,  
 grila priva vorgeresi,  
 vira vorga pivaresi  
 vipareŝi  
 mi neŝeŝi  
 neŝeŝi  
 ŝuvi puvi povapovaŝ  
 diri kie ŝiŝ ŝin trovaŝ  
  
 la ne  
  
 la ne-ŝe  
  
 ne-ŝeŝ  
  
 ŝeŝ  
 dako danto danko dankon  
 dankon  
 pardonu mineŝtaŝ bria  
 padon'  
  
 padon'  
  
 'kon  
  
 'kon  
  
 paŭzo  
 naŭzo

この鼎談の席上では「酔っぱらい」だけではなく、オールドの主著とされることが多い*La infana raso* (『子どもの種族』)の第一章の日本語訳もあわせて紹介されたのだが<sup>14</sup>、谷川が思想的には「深い」この作品ではなく、ことば遊びの要素が強い「酔っぱらい」に注目した点が興味深い。日本語におけることば遊びの可能性を探求してきた谷川ならではの好みを感じさせるといえよう。また『子どもの種族』が、それだけ難解であるということにもなる。ここでやや脱線気味に付け加えると、エスペラント界では『子どもの種族』が高く評価されているので、海外でオールドの作品を民族語に訳した事例は、そのほとんどがこの長編詩を翻訳したものである<sup>15</sup>。しかし、これらの翻訳はエスペラント文学に詳しくない一般の読者層を対象にしているのだから、いきなり『子どもの種族』の全訳を提示することは必ずしも適当とはいえない可能性がある。つまり、もっと理解が容易で、面白い作品をいろいろ紹介することの方が、主著の全訳よりも必要なのかもしれない。その後、谷川の薦めもあって筆者自身、日本語でウィリアム・オールドの選詩集を刊行することができたが、この選詩集では『子どもの種族』からは3章を訳出するにとどめ、オールドの他の詩集からできるだけ多様な作品を採録した。

いずれにせよ、谷川は実際にエスペラントで書かれた作品に、その日本語訳をとおして触れること

によって、エスペラント文学の可能性について目を開かれることになったわけである<sup>16</sup>。谷川が虚心にオールドの作品を受け入れることができたのは、かれ自身の創作言語に関する考え方の変化によるところもあるかもしれない。谷川は例えば、上述の鼎談において次のように語っている。

僕なんかやっぱり母語ナショナリズムというものが自分の中にある（…）詩は絶対に日本語でしか書くべきではないみたいのがあったんですよね。それが少しずつ崩れてきていますよ、僕。つまり、母語を絶対視するのは、たとえ詩人でもいかなものかというふうにはなっています。<sup>17</sup>

谷川はここで、以前は詩を書くのは母語でなければならないという観念を持っていたが、今はそのような考え方に懐疑的になっていると述べている。エスペラントで創作する人は、そのほとんどがエスペラントを母語としていないのだから<sup>18</sup>、今日の谷川にしてはじめてエスペラントの詩を評価できたともいえる。つまり、谷川がオールドに「出会えた」のは、実際に作品に触れたということに加えて、谷川自身が母語を絶対視しなくなったおかげもあったと考えられる<sup>19</sup>。

### 3. 2 谷川とオールドの「共鳴」

先に述べたように、谷川はオールドの詩の拙訳を読み、そこから訳詩集を出すことを提案することになった。こうして2007年7月、日本語訳オールド詩集の刊行に至るわけである。その原稿を出版社に渡した同年の5月、版元であるミッドナイト・プレスの岡田幸文に相談にのってもらいながら、筆者は、谷川に対してエスペラント詩人との「朗読の夕べ」への出演を依頼し、承諾を得ることができた。6月も末に入って当日のプログラム内容を決めようと谷川に連絡を取ると、すでにオールド詩集の原稿に目を通していた谷川から、オールドの作品の中に自分の詩と似たテーマを扱っているものをいくつか見つけたので、それらを自分の作品とともに朗読したいという提案を受けた。この際、かれの挙げたオールド作品が“Mi ne pretendas ploron”「ぼくは泣きはしない」および“Poemo estas koito”「詩とは性交」の二篇であり、谷川作品は本稿冒頭で述べた「しぬまえにおじいさんのいったこと」、「ふくらはぎ」、「なんでもおまんこ」の三篇であった。ここでは谷川がこれらのオールド作品と自作品の間にどのような「共鳴」関係をみいだしたのかを述べておきたい。

オールドの「ぼくは泣きはしない」は、この詩人が自らの死後を思い描いて書いた作品である。無神論者であったオールドは、死後の世界があるとは考えていない。自らの肉体は「腐敗するばかり」で、「心臓からは柳が生え」て自然にかえるが、同時にそのことはこの世の苦しみから解放されることを意味するだろう、という趣旨のことが述べられている。これに対して、性を主題とした「詩とは性交」は、フロイト的と称されたこともあり<sup>20</sup>、詩を作ることが性交と似た行為であり、そして「逆もまた真」であると述べている。つまり、詩作と性交のどちらの場合にも、その背後にはリビドーが存在していて、それが「氾濫してしまったもの」だというのである。このようにオールドの場合、死と性という主題がそれぞれ別個の作品に、それもかなり直截的に歌われている。

それでは谷川自身の作品は、どのようなものだったのだろうか。「しぬまえにおじいさんのいったこと」では死が中心的な主題であり、性はあまり出てこない。「わたしの いちばんすきなひと」に「わたしは むかしあなたをすきになって／いまも すきだ」と「つたえておくれ」というのだから、むしろ清らかな愛を感じさせる。だが、「ふくらはぎ」においては、同じように死の前後の場面が舞台になっているが、そこで描かれている主題はもう少し俗っぽいものである。つまり、「生前俺が電

話にも出なかった男」が「まっしろなベンツに乗って」弔問に訪れ、「隣家の小五は俺のパソコンをいたずら」している中で、かれが思うのは「あのひとのふくらはぎに」「もっとしつこく触っておけばよかった」ということなのだ。人は死に際してすら（あるいは際してこそ）性を思うものであり、それだけ死と性が結びついていることを谷川はいわんとしているのだろう。

「なんでもおまんこ」では、登場人物が十代の少年に変わり、しかも死において性を思うのではなく、性において死を思うという逆転が行われている。

なんでもおまんこ<sup>21</sup>

谷川俊太郎

なんでもおまんこなんだよ  
 あっちに見えてるうぶ毛の生えた丘だってそうだよ  
 やれたらやりてえんだよ  
 おれ空に背がとどくほどでっかくなれねえかな  
 すっぱだかの巨人だよ  
 でもそうなったら空とやっちゃうかもしれねえな  
 空だって色っぽいよお  
 晴れてたって曇ってたってぞくぞくするぜ  
 空なんか抱いたらおれすぐいっちゃうよ  
 どうにかしてくれよ  
 そこに咲いているその花とだってやりてえよ  
 形があれに似てるなんてそんなせこい話じゃねえよ  
 花ん中へ入っていきたくってしょうがねえよ  
 あれだけ入れるんじゃねえよお  
 ちっこくなくなってからだごとぐりぐり入っていくんだよお  
 どこ行くと思う？  
 わかるはずねえだろそんなこと  
 蜂がうらやましいよお  
 ああたまんねえ  
 風が吹いてくるよお  
 風とはもうやってるも同然だよ  
 頼みもしないのにさわってくるんだ  
 そよそよそよそようまいんだよさわりかたが  
 女なんかめじゃねえよお  
 ああ毛が立っちゃう  
 どうしてくれるんだよお  
 おれのからだ  
 おれの気持ち  
 溶けてなくなっちゃいそうだよ

おれ地面掘るよ  
土の匂いだよ  
水もじゅくじゅく湧いてくるよ  
おれに土かけてくれよお  
草も葉っぱも虫もいっしょくたによお  
でもこれじゃまるで死んだみたいだなあ  
笑っちゃうよ  
おれ死にてえのかなあ

要するに、性に目覚めたばかりの少年が、「丘」「空」「花」「風」と「やる」ことを夢想し、「おれ地面掘るよ」「おれに土かけてくれよお」というに至るのである。最後に「これじゃまるで死んだみたいだなあ」「おれ死にてえのかなあ」という台詞があり、性の衝動が死とつながっていることが暗示されている。

性と死を結びつけることは普遍的にありそうだが、興味深いのはオールドが提起したテーマを、あたかも谷川が引き受けて、さらに深化させたような観があることである<sup>22</sup>。それにつけても残念なのは、オールド自身がこの「朗読の夕べ」に参加することができなかったことだ<sup>23</sup>。オールドは2006年9月にこの世を去ったので、谷川は一人でオールドの作品に「共鳴」し、その「見立て」をするしかなかったのだ。もしオールドが健在であったならば、谷川の「見立て」に対して、オールドがさらに違う作品を提案したり、さまざまなコメントを投げ返すことで、二人の偉大な詩人の間に興味深い「対話」が成り立っていたかもしれない<sup>24</sup>。そして、実際に「朗読の夕べ」に出席したエスペラント詩人のエルティルに関しては、朗読用の数作品しか日本語訳できなかったのも、別な意味でやはり「対話」の可能性が限定されてしまったのである。これは谷川が、「日本語以外の言語の詩人らと、これほど親しく語り合えたのは初めて」<sup>25</sup>との感想を述べているだけに、やはり残念なことであった。

この章では、谷川がどのようにオールドと「出会い」、どのように「共鳴」したのかを跡付けてきた。以上を枕に次の章では、谷川の「なんでもおまんこ」の日本原文とエスペラント訳を分析してみたいと思う。

#### 4. 「なんでもおまんこ」の〈翻訳不可能性〉

この章では、「朗読の夕べ」の当日に朗読された谷川作品の一つ、「なんでもおまんこ」の日本語原文とそのエスペラント訳を比較し、詩の〈翻訳不可能性〉について考えてみたい。本稿の冒頭で、この詩の原文とエスペラント訳が興味深い対照をみせていると述べたが、これは具体的にいうと、この詩が日本語にかなり独自の表現方法に強く依存しているため、どんなに優秀な翻訳者が翻訳しても、その過程で取りこぼされる要素がかなりあるということである。そのため、日本語原文とエスペラント訳では、読者が受け取る印象がかなり異なってしまうようなのだ。まず「なんでもおまんこ」を、これと同時に朗読された二つの谷川作品と比較し、続いて「なんでもおまんこ」自体を分析することで、その〈翻訳不可能性〉について考察したい。

#### 4. 1 「なんでもおまんこ」は翻訳では伝わらない？

すでに述べたように2007年6月末、筆者は谷川から、「朗読の夕べ」で朗読する三作品のテキストを受け取った。そしてそのすぐ後、泉に谷川作品のエスペラントへの翻訳と当日の通訳を依頼したのである。しばらくして泉から送られてきた訳文をみて、筆者はその翻訳が、期待に違わず質の高いものであると感じた。しかしその後、日本語原文を読めない海外のエスペランティストによるコメントから、作品によって理解度にかなり差がある可能性に気が付いたのである。ここで問題になっている谷川作品の場合、日本語に非常に特徴的な表現方法に依存している度合いの強弱が、理解度の差に影響していると思われる。よく詩は翻訳不可能といわれることがあり、もちろん100%の翻訳は不可能であるが、特定の作品で使われている言語的表現手段が、翻訳の困難さの度合いに影響する場合があるというわけだ。しかしここでは、この点を考察する前に、翻訳の困難さを念頭に置きながら、谷川の三作品の内容を再度確認しておくことにしよう。

三つの作品のなかでも、「しぬまえにおじいさんのいったこと」(以下、「しぬまえに…」と略す)が一番分かりやすい詩だといえる。分かりやすいというのは、単純だとか簡単だということではなく、普遍的に理解される可能性が高いということである。死にいく老人が、「いちばんすきなひとに」「あのよで つむことのできる／いちばんきれいな はなを」捧げると言い残すというのは、おそらく文化の違いを超えて、人々の共感を呼ぶのではないだろうか。実際、「朗読の夕べ」の出演者の一人だったシュティメッツは、この詩の日本語原文とエスペラント訳をクロアチアのエスペラント雑誌に載せ、さらにエスペラントから重訳したクロアチア語訳も添えている<sup>26</sup>。筆者はシュティメッツになぜ「しぬまえに…」を選んだのか、その動機を特に尋ねたわけではないが、この詩に共感したからこそ掲載を決めたのであろう。そして言語的にみても、この詩には著しく翻訳を困難にする要素はあまりないようである。

これに対して「ふくらはぎ」は、もう少し頭をひねることを要求するところがある。「しぬまえに…」の主人公が「おじいさん」と明示的に示されているのに対して、「ふくらはぎ」の主人公がどのような人物なのかは、はっきりと書かれていない。読者は詩の描写から、主人公がおそらく壮年の男性と推測するのだが、そのためのヒントは詩の中にいくつか述べられている。だが言語的には「しぬまえに…」と同じく、それほど翻訳が困難な箇所は少ない。つまりこれら二編の詩はいずれも比較的素直に、「そのまま」に近いカタチで翻訳できるだろう。もちろん「そのまま」といっても、どんな詩の翻訳も何らかの変換を必要とするものであり、日本語の詩をエスペラント訳する場合も例外ではない。エスペラントで詩らしく響くようにするためには、原文にはない韻律を施したり、内容を文化的に微妙に調整することが求められることが少なくない<sup>27</sup>。しかしそのような配慮ができる訳者であれば、これら二篇の詩の翻訳で超えられない障壁にぶつかることはないはずだ。

ところが「なんでもおまんこ」の場合、同じようなわけにはいかないようである。筆者自身が日本語を母語とするため、この詩が理解できないということの意味がとっさには分からなかったが、「朗読の夕べ」に出席していた海外からの参加者で、「この詩はどこが詩的なのか分からない」と感想を述べた人がいた。もちろん十代の少年が性を思い、そして性が死につながっていることを直感するという内容は、文化を超えてかなり理解可能だろう。そのため当初は、この人の文学に対する個人的な理解能力に問題があるのではないかと考えた。しかし「なんでもおまんこ」の日本語原文とエスペラント訳を比較することで、泉のような優れた訳者によっても、重要なニュアンスが伝わらない可能性があることに気が付いた。それほどこの詩では、日本語に特徴的な言語表現が多用されているのであ



る。それゆえ、日本語が分からない人はこの詩をなかなか理解することができなかったようだ。しかしここでいう、日本語に特徴的な表現とはどのようなものかというのであろうか。次節では、英語／エスペラントと日本語の語用論上の違いを明らかにして、この点を理解する足がかりとしたい。

#### 4. 2 命題重視の言語とコンテキスト重視の言語

どんな言語の使い手でも、ある別の言語を話している使い手とまったく異なった言語手段でコミュニケーションをするということはありえない。人間が言語を使っている限りにおいて、異なっているといってもそれは程度問題であって、だいたい似たようなことをしているものである。本稿の目的に即してこの点をいいかえようとすれば、次のような引用文が有用であろう。

何かを言おうとする。その内容つまり命題をただそのまま言って実際の発話が成り立つことは、まずないであろう。(…) コンテキストに応じて言いたい内容、つまり命題内容をどのように言うかを考えねばならない。命題に話し手の判断や配慮で色付けをする言語的要素をここではまとめてモダリティということにする。「言うという行為」は、コンテキストに合致するようなモダリティ表現に包んで命題を言う、という構造で成りなっている。この原理は、どの言語の「言うという行為」においても程度の差こそあれ同じようにあると言えよう。<sup>28</sup>

要するにどんな言語を使っている人も、人はある命題を、状況(=コンテキスト)にあったモダリティ表現に包んで表現するというわけである。このようにして言語は、命題に対する話し手の態度表明(=モダリティ表現)をとおして状況(=コンテキスト)とつながるというわけだ。

ところがもう少し詳しくみると、命題を重視する傾向の強い言語と、コンテキストを重視する傾向の強い言語が存在している。日本語については、「命題内容だけでなく、話し手がその命題内容をどう捉えているか、態度を表明するモダリティが必要不可欠である」<sup>29</sup>とされる。つまり日本語の、少なくとも話しことばでは、命題むき出しに近い

きのう本買った。

という発話はやや不自然である。

きのう本買ったの。

きのう本買ったんだ。

きのう本買いました。<sup>30</sup>

などのように、話し手が誰で、どのような態度で話しているかを明らかに必要があるとされている。上記の例文でモダリティ表現が、みな「の」「んだ」「ました」と文末表現になっていることに注意をしておいてほしいが、ともかくここから、日本語ではコンテキストを重視する傾向が強いことが分かる。

これに対して英語では話しことばであっても、単に”I bought a book/some books yesterday”といえはよく、話者の態度を表明することは必須ではない。要するに、

英語の場合、(…) 命題が発話として表わされる際、相対的にみるとコンテキスト要素が日本語ほどには影響を与えることがない。従ってモダリティ表現が付加されることが必ずしも必要ではないことを示す。言い換えれば、命題がコンテキストにあまり関わりなく独立している傾向が強いことを表わしている。英語では「言うという行為」をコンテキストも含めて外の視点から

ながめ、客観的な認識に基づいて話す傾向が強いことを示している。<sup>31</sup> (下線は引用者)

とされている。つまり英語では、日本語とは対照的に、モダリティ表現が必須ではなく、コンテキストよりも命題を重視する傾向が強いのである。ここから命題を重視する英語が、その帰結として客観的認識に依拠する傾向が強いということになるが、それは翻れば、コンテキストを重視する日本語は、主観的認識に依拠する傾向が強いということにもなる。

さて、ここで英語と日本語の違いについて述べたことは、どの程度エスペラントと日本語の違いにも当てはまるだろうか。この点を知るためには、先の「きのう本買った」という一文をエスペラントに訳してみればいい。結果としてわれわれは”Mi aĉetis libron/librojn hieraŭ”という訳文を得る。日本語にあるような、「きのう本買ったの」「きのう本買ったんだ」「きのう本買いました」といったニュアンスによるバリエーションは、英語の場合と同じく、エスペラントでも言語形態として表出されない。そこで英語について述べられた次の文は、エスペラントにもそのまま当てはまることになる。

英語では、イントネーションやジェスチャーなどノンバーバルの表現や副詞で話し手の態度、つまりモダリティを示すことがあるとしても、日本語のように明示的な言語形態で表わすことはあまりない。英語では、モダリティ表現がなく、話し手の態度がはっきりしない。つまりあいまいである。<sup>32</sup>

命題の観点からすると日本語が「あいまい」とされるが、モダリティの観点からすると英語の方が「あいまい」だ。この一文は逆転の発想でこのように述べているが、エスペラントについてもモダリティ的な「あいまい」さが認められるといえよう<sup>33</sup>。そしてここで本論に立ち戻ってみれば、日本語と比較した場合にエスペラントが示すモダリティ的な「あいまい」さ(=モダリティが言語的に表出されないこと)にこそ、「なんでもおまんこ」のエスペラントへの翻訳が困難な原因が潜んでいるといえるのである。そこで次節では本題に立ち戻り、この節でみた英語／エスペラントと日本語の語用論上の違いの観点から、「なんでもおまんこ」のテキストを考察してみよう。

#### 4. 3 「なんでもおまんこ」にみる主観と客観

前節では結論を先取りして、「なんでもおまんこ」のエスペラント訳が困難なのは、日本語ではモダリティ表現が発達しているのに対して、エスペラントではモダリティがあまり言語的に表出されない、つまり「あいまい」であるためだと述べた。実際にこの作品の日本語原文をみると、ほとんどすべての行はモダリティ表現で終わっている。

なんでもおまんこなんだよ  
あっちに見えてるうぶ毛の生えた丘だってそうだよ  
やれたらやりてえんだよ  
おれ空に背がとどくほどでっかくなれねえかな  
すっぱだかの巨人だよ

…

このようなモダリティ表現は、一見枝葉の問題のように思われなくもないが、前節でみたように、これらの表現によって発話はコンテキストにむすびつけられるのである。つまり、モダリティ表現の多少は、発話とコンテキストのむすびつきの度合いを示し、発話全体の語りのスタイルを性格付ける役

割を果たしている。そして二つの言語間で発話のスタイルが著しく異なっている場合には、その間の翻訳はかなりの困難が伴うことになる。

すでに、英語は客観的な認識に依拠する傾向が強く、それに対して、日本語は主観的な認識に依拠する傾向が強いと述べたが、それを違った言い方で、もっと具体的に表現すると次のようなことになる。

ここにみる日本語の話し言葉の特徴は、主観性を帯び、場の中に会話参加者が埋もれた状況での発話である。英語の発話は発話状況を客観的に捉え、命題のみを過不足なく述べているものとなっている。言いかえれば、日本語の発話には話し方から話し手の感情までも伝わってくるが、英語で書かれた発話は、事実を伝えるだけで日本語のような発話者の体温が伝わってくるものではない。<sup>34</sup>（下線は引用者）

前節でみたように、ここで述べられていることは、ほぼそのままエスペラントにも当てはまると思われる。4. 1で、「しぬまえに…」や「ふくらはぎ」を翻訳しようとしても、訳者は超えられないような困難に直面しないが、「なんもおまんこ」の場合にはかなりの困難があることを指摘したが、その原因もここで明らかになってくる。「しぬまえに…」と「ふくらはぎ」には、ほとんどモダリティ表現がみられないが、「なんでもおまんこ」はその連続である。それは前者がかなり客観的に命題を述べる語り口であるのに対し<sup>35</sup>、後者が極めて主観的で、まさに「発話者の体温が伝わる」語り口だからである。客観的なスタイルならば、これをエスペラントに移し変えることはさほど困難ではないが、主観的なスタイルの翻訳はかなり困難になってしまう。それはエスペラントにモダリティ表現があまり多くないことに起因しているのだが、その背景にはエスペラントと日本語の言語文化的な差異が横たわっているのである。

以下では、実際の「なんでもおまんこ」のエスペラント訳に即して、訳者がどのような工夫をこらしているか、そしてそれがどの程度、原文のニュアンスを伝えることに、成功しているかを考察しておきたい。まず、「なんでもおまんこ」の第一行目をみてみよう（以下、「なんでもおまんこ」からの引用はまず日本語原文、次に行を改めてエスペラント訳、そしてこれに続けて、括弧内にエスペラント訳の日本語直訳を掲げることにする）。

1-a なんでもおまんこなんだよ

1-b Je piĉoj piĉozas la mondo（おまんこにかけて、世界はおまんこの的なものである）

ここで作者はもちろん、「すべてのもの＝おまんこ」という客観的な命題を述べているのではない。この等式は主人公の妄想であり、主観的なリアリティでしかないのである。1-a では「…なんだよ」というモダリティ表現によって、そのことが示されている。ところが同等のモダリティ表現がエスペラントにはないので、そのまま直訳してしまうと、「世界＝おまんこ」が客観的な事実であるかのような、奇怪な一文が出現してしまう。それを防ぐため、訳者は1-bのように「世界はおまんこの的なものである」という説明的な表現を選択せざるをえない。要するに、モダリティ表現があるおかげで、日本語の原文では、主人公がコンテキストの中から、主観的に自分の印象として「なんでもおまんこなんだよ」と語りだせるのに対して、エスペラント訳では同一人物が、コンテキストをあたかも外部から客観的に俯瞰しているかのように、「世界はおまんこの的なものである」と述べざるをえないのだ。

井出は、「日本語の発話には話し方から話し手の感情までも伝わってくる」と述べている。そのよ

うないわば「血の通った」日本語の表現が、エスペラント訳されると「冷たい」客観的な表現になってしまう例は、「なんでもおまんこ」の中に少なくない。例えば、

- 2-a 空なんか抱いたらおれすぐいっちゃうよ
- 2-b Brakumon ĉielan tuj sekvos ejakulo (空の抱擁にすぐ続くのは射精)
- 3-a ああたまんねえ
- 3-b Sensoj renovas (感覚は更新される)
- 4-a どうしてくれるんだよお
- 4-b Sur senhelpa sino (どうにも助けようのない胸の上で)

なのである。2-a で「おれすぐいっちゃうよ」という感極まった主観であるものが、翻訳されると、2-bのように、単に物理的な現象としての「射精」という名詞で置き換えられてしまう。似たような転換は、3-a と 3-b、4-a と 4-b の間でもみられる。どちらの場合も、非常に主観的で感覚的な発話、つまり 3-a 「ああたまんねえ」や 4-a 「どうしてくれるんだよお」は、すっかりその主観性を抜き取られてしまっている。しかしそれはまた、後にみるように、話しことば的な表現のまま訳してもエスペラントとしてはしまりがなくなり、詩を感じさせることができないためでもあろう。

日本語の主観的表現がエスペラントの客観的表現に転換される際、同時に主客の逆転が起こる例があるのも興味深い。

- 5-a 空だって色っぽいよ
- 5-b Kokete la ĉiela etero invitas (魅惑的に空の精気が招いている)
- 6-a 晴れてたって曇ってたってぞくぞくするぜ
- 6-b Serene aŭ nube ĝi incitas (晴れても曇ってもそれ [=空の精気] は刺激する)

5-a では、主人公の「おれ」には「空が色っぽく感じられる」という、主観の語りになっているが、5-a では日本語原文では客体であった「空」が、自ら主体となって「おれ」を「魅惑的に招く」という客観の語りになっている。そこでは「空を色っぽく」感じていた「おれ」の主観は抜け落ちてしまうのだ。詩のなかではすぐ次の行である 6-a、6-b も同様の事例であり、6-a では「おれ」が「ぞくぞく」していたのに、6-b では「空」が「おれ」を刺激することになっている。エスペラント訳では、「おれ」の主観は切り捨てられてしまうわけである。この詩の主人公でなくても、「どうしてくれるんだよお」といいたいところだ。

また次の二つの事例では、原文の語りが、現場にいる主人公の視点から行われているのに対して、エスペラント訳では、それが第三者的なものになっている。これも主観性と客観性の対比の一変種といえることができる。

- 8-a 土の匂いだよ
- 8-b Kaj flaros la humon (土を嗅ぐ)
- 9-a 水もじゅくじゅく湧いてくるよ
- 9-b Kiu akvon sekrecios (水を溢れさせるところの [土を])

日本語を読むと、実際に土の匂いが鼻を突き、眼前に水が湧いてくるのを、主人公の目線で見ると、妙な気がする。ところがエスペラントでは匂いを嗅いだり、水の湧くのを見ている主人公を、第三者の立場からさらに見ているかのようなのである。

この詩の最後の二行でも、日本語原文とエスペラント訳は鮮やかな対比をなしている。そこで主人公は、自らの妄想の果てに、地中に埋めてほしいという欲求を抱くにいたるのである。そして次のようにいう。

10-a 笑っちゃうよ

10-b Konkludo ridinda: (笑うべき結論)

11-a おれ死にてえのかなあ

11-b Deziro al ekstermo. (滅亡への欲求)

原文は「よ」「かなあ」というモダリティ表現のおかげで、まさに少年の息吹が感じられる独白になっている。しかし、これをそのままエスペラント訳すると、モダリティ表現が落ちてしまうので、まるで教科書の例文のような興ざめな表現になってしまう。例えば、(これはまったくの散文訳でしかないが、あえて例を挙げれば)” Mi ne povas deteni min de ridi. Mi suspektas ĉu mi volas morti” 「わたしは笑いを抑えることができない／自分が死にたいのかとわたしは疑う」などとなるのが落ちだ。このため、訳者は大胆な意識を試みるのである。その結果はそれ自体としては見事としかいいようがないのだが、やはり原文の独白、いや主人公自体も消えうせてしまい、原文の趣旨だけが客観的に言語化されている。そこで並んでいる単語が抽象名詞であるということも、何が詩的かという感覚において、西洋と日本が異なっている事実を示しているように思われる。まるで、少年の肌のぬくもりにかわって、大理石の冷たさが対置されたかのようなのである。

以上みてきたように、「なんでもおまんこ」の訳者である泉が、日本語とエスペラントという、異なった言語文化の間を橋渡ししようと巧みな翻訳を行っている。実際、「しぬまえに…」や「ふくらはぎ」では、翻訳を介しても詩のメッセージがかなり正確に読者に伝わっているようだ。しかし作品が翻訳される先の言語であるエスペラントに、モダリティ表現があまり存在しないといことは、訳者個人の努力では如何ともし難い側面がある。つまり、「なんでもおまんこ」においては、あまりにも強い言語相対性の縛りがあったのではないだろうか。ただしここでの筆者の分析は、どこまでも卓上の理論に基づくものであって、それがどこまで実際の、さまざまな母語を持つエスペランティストによる理解と一致しているかは、実際にそのような人たちの反応を見なければ即断できないものも事実である。<sup>36</sup>

## 5. おわりに

本稿では、まず前半で、日本（語）の詩人である谷川俊太郎が、どのようにエスペラントの詩人ウィリアム・オールドを知り、オールドの作品に「共鳴」したかを見た。そして後半では逆に、エスペラントに翻訳された谷川の作品が、いかに日本語を知らない人々に理解され、また理解されえないのかを特に「なんでもおまんこ」という詩の言語表現を中心に考察してきた。最後にここでは扱いきれなかった課題について触れて、本稿を締めくくりにしたい。

本稿でみてきたように、「なんでもおまんこ」をエスペラントに訳すことの困難性（翻訳不可能性）は、この詩が日本語に特徴的なモダリティ表現を多用していて、しかも、このような表現、そしてその立脚している主観的な視点が、エスペラントでは非常に表現しにくいところに起因している。エスペラントがこのような視点を扱いにくいということは、「中立的」な言語であると称されることの少なくないエスペラントが、実際にはかなりヨーロッパ的な性格を持っていることを示唆している（少なくとも、英語と同じくらい、モダリティ的には「あいまい」であるとはいえよう）。従来、エスペラントのヨーロッパ性を論じるときには、もっぱら言語構造上の特徴が問題にされることが多かった<sup>37</sup>が、言語構造だけに注目する姿勢自体が、ヨーロッパ語を主な研究対象にしてきた近代言語学に端を発しているものである。もっとエスペラントの語用論的な側面を研究する必要があると思われる。

また本稿はもっぱら、詩を日本語からエスペラントに翻訳する場合に問題を考察してきたが、日本文学ないし日本の詩のエスペラントへの翻訳は、それだけで考察するのではなく、例えばその英語への翻訳とも比較する価値がある。というのも、エスペラントがそれを日常用語としている母語話者の共同体を持たない（母語話者はいるが、母語話者が地域共同体を形成していない）のに対し、英語は強固な母語話者の言語共同体を持っているので、このような対照的な共同体を背景に行われる翻訳作業は、かなり異なった性格を持っているものと思われる。そもそも日本文学のエスペラント訳は、もっぱら日本人のエスペランティストの仕事であるが、日本文学の英訳は多くの場合、英米人の手になるものである<sup>38</sup>。

さらに、4. 3の最後の方ですこし触れておいたが、日本語とエスペラントにおいて、詩的とされるものの基準はかなり異なっている。それがこれら二言語の特性（例えば、日本語におけるモダリティ表現の豊富さ）と、どのように結びついているのだろうか。もちろんそこには言語の影響だけではなく、さまざまな文化的な要因が絡んでいるはずであり<sup>39</sup>、一筋縄では行かない問題ではあるが、少なくとも今後の課題としてここに挙げて筆をおくことにしたい。

## 注

- 1 この大会は、同年8月4日から11日までパシフィコ横浜ほかを主会場に、57カ国から1901名の参加者を得て開催された。
- 2 南川航『ハイウェイの木まで』泉幸男企画室、1978年。http://www.f5.dion.ne.jp/~tizumi/poemaro.htmでみることができる。
- 3 ZAIMとは2006年から横浜市が、旧関東財務局および労働基準局の建物を「横浜トリエンナーレ2008」のために開放しているもの。もともと「横浜トリエンナーレ2005」の際に使用したのが、開放のきっかけになったという。
- 4 当初は、ブラジルのエスペラント詩人ジェラウド・マトシュ氏にも出演依頼をしていたが、病気のため来日できなくなったので、詩人ではないがエスペラント文学に詳しいスポメンカ氏に代役を依頼した。
- 5 言語はすべからず人間が社会的に機能させるものであり、その意味でみな「人工」であるから、エスペラントだけを取り立てて「人工語」とすることには問題がある。そのため、近年ではドイツ語圏を中心に、「計画言語」(Plansprache)と呼ぶことが多くなっている。
- 6 エスペラント文学については日本語ではさしあたり、渡辺克義「エスペラントに文学は可能か」(『月刊言語』第35号11巻、pp.48-55)を参照のこと。
- 7 このあたりの経緯については、山本真弓編『言語的近代を超えて』(明石書店、2004年、pp.295-6)を参照されたい。
- 8 筆者は、オールドがノーベル文学賞の候補になった背景について、数回講演や研究発表をしているが、残念ながらまだ活字にする機会に恵まれていない。
- 9 オールドの経歴については、オールド、ウィリアム『ウィリアム・オールド詩集：エスペラントの民の詩人』(白井裕之訳、ミッドナイト・プレス、2007年、pp.109-125)を参照されたい。
- 10 Auld, William. *En barko senpilota* (Pizo, Edistudio, 1987, p.849)参照。山本編、前掲書 (pp.243-4)にこの部分の日本語訳が引用されている。
- 11 連載対談「超えていくことば(たち)」『詩の雑誌midnight press』No.29、2005年秋、pp.38-9。
- 12 この詩はオールド、前掲書 (pp.26-30)にあるが、本稿のために若干の修正をしている。
- 13 エスペラントの全文は、Auld、前掲書 (pp.198-9)で読むことができる。
- 14 そのため、『詩の雑誌midnight press』(No.29、2005年秋)には「酔っ払い」だけでなく、『子どもの種族』の第一章も掲載された。

- 15 オランダ語、ハンガリー語、ポルトガル語、ポーランド語の翻訳が出版されている。英語、フランス語、スコットランド語でも草稿はあり、ネット上で公表されている。
- 16 この点は、谷川自身が次のように語っている。「ウィリアム・オールドという詩人の詩がすごく面白かったんです。日本語に訳してこれだけ面白いんだから、エスペラント詩としても、これは世界のどんな言語とも匹敵するんだろうなと思ったんです」（『論座』通巻148号2007年9月号、p.142）。
- 17 連載対談「超えていくことば（たち）」、p.28。
- 18 エスペラントを母語の一つとして育った子どもたちは、今や数百人ほどいるとされているが、そのような子どもたちの中から、著名なエスペラント作家や詩人が輩出されたことはまだあまりない。このようなエスペラントの話者に関しては、Versteegh, Keith. “Esperanto as a First Language: Language Acquisition with a Restricted Input,” *Linguistics* (31, 1993, pp.539-555)、Corsetti, Renato. “A Mother Tongue Spoken Mainly by Fathers,” *Language Problems and Language Planning* (20, 1996, pp.263-273)などを参照のこと。
- 19 もっともエスペラントの作品を示されても、誰でもこう虚心に反応するわけではない。筆者はある学会でオールドについて発表し、同時に、谷川に示したのと同じ二つの詩の訳も配ったことがある。この際、これを聞いていたある学者が（おそらく詩の訳をほとんど読むこともなく）、「文学が存在してしまったということは、エスペラントの目的がそもそも達成できないということだ」という感想を述べた。この人のいう「エスペラントの目的」とは、おそらく人類の共通語になるということなのだろう。そして、エスペラントのような言語には、文学は必要ない、または存在してはならないという意見は古くはオットー・イエスペルセン (Jespersen, Otto. *An Internationa Language*. London, George Allen & Unwin, 1928, p.27) や、わが国では鈴木孝夫（『三田評論』第748号、1975年5月号、p.13）などが述べているところだが、目的がなんであれ、エスペラントの文学が存在してしまった限り、それは鑑賞や研究に値するはずである。だがこの学者には「エスペラントの目的」だけがあって、目の前にある作品は目に入らないかのようであった。ちなみに、その人は同じ学会で小説の題材にした研究発表を行っていたが、この程度の認識で文学をきちんと論じることができるのか、まことに心もとないと思わざるをえない。
- 20 Auld、前掲書、p.60。
- 21 『夜のミッキーマウス』新潮文庫、2006年、pp.26-8。
- 22 これについては、オールドと谷川の個性の違いもあろうが、それぞれの作品が書かれた時期も関係しているかもしれない。オールドの作品は、「ぼくは泣きはしない」が1950年代前半、「詩とは性交」が1959年に書かれている（後者はAuld 前掲書p.313.）。これに対して谷川の作品は、「しぬまえにおじいさんがいったこと」が1999年刊行の『みんなやわらかい』所収、「ふくらはぎ」は1985年初出（『詩を贈ろうとすることは』、1991年、p.102による）、そして「なんでもおまんこ」は1995年初出（『夜のミッキーマウス』新潮文庫、2006年、p.116による）となっている。オールドは1924年生まれ、谷川は1931年生まれだから年齢的に近いが、1950年代のスコットランドと、1980～90年代の日本では、似たような主題でも異なった詩になって当然であろう。また、オールドが晩年にはほとんど詩を書かなくなったことも、関係しているかもしれない。
- 23 筆者は谷川とオールドを引き合わせて、朗読会を行うアイデアを、まだ何のあてもなかった2001年頃から抱いていた。白井裕之「がんばれ！21世紀のエスペラント：連載3 新しい売り込みのすすめ」（『エスペラント』2001年7月号p.28-9）では、そのような発想について書いている。
- 24 さらに、谷川の作品もある程度まとまってエスペラント訳されていれば、対話はさらに実り豊かなものになっていたことであろう。ただし、谷川の作品は英語などにかなり訳されているので、それらによって代用することも可能であったかもしれない。実際、筆者はエルティルに、英訳の『二十億光年の孤独』を貸し与えていた。
- 25 2007年8月30日の朝日新聞記事「『エスペラント』誕生120年～言語考える書籍や大会」より。そこで谷川は詩人同士が親しく話し合えたのは、「エスペラントが若い言葉であるという特性と切り離せないことでしょう」と述べているが、「朗読の夕べ」に出席した、ある日英同時通訳者は筆者に対し、日英二言語間のプロ通訳者でも、文学の造詣の深い人は非常に少ないが、「朗読の夕べ」では文学をよく知っているエスペランティストが通訳を務めたことが、原因ではないかと語った。
- 26 “Japana poeto TANIKAWA Shuntarō gastas en Tempo.” *tempo* (Kroata Esperanto-Ligo), n-ro 96, oktobro 2002, pp.4-5.
- 27 エスペラントという「中立な言語」といわれてきたので、この言語に文化があるのかと思われるかもしれないが、ハンフリー・トンキンが述べているように、「エスペラントの現代史は、この限界を超えてこの言語を真に世界的なものにしようとする努力の歴史であった」が、しかし「この言語が考え出された根源はヨーロッパ、それも西ヨーロッパの文化の中にあった」のである (Tonkin, Humphrey. “Esperanto: kulturo, lingvo, historio.” En: Universidad de la Laguna. *Serta Gratulatoria in Honorem Juan Regulo II: Esperantismo*. La Laguna, Universidad de la Laguna, 1987, pp.731-5)。つまり、エスペラントの言語文化的な基盤は、かなり西ヨーロッパ的だといわざるをえない。また、詩に関していえば、エスペラント詩の規範を定めたとされるKalocsay. K. k.a *Parnasa gvidlibro* (Pizo, Edistudio, 1984)をみても、西ヨーロッパの文学に範を取った詩形が多いことが分かる。
- 28 井出祥子『わきまえの語用論』大修館書店、2006年、p.27。
- 29 同書、p.29。
- 30 ここの例文は英語のものも含め、井出、前掲書、p.10-1から取った。
- 31 同書、p.30。
- 32 同書、p.12。
- 33 筆者自身、エスペラントを学んでもない中学生の頃、エスペラントのこの「あいまい」さに悩んだ記憶がある。つまり、そのような術語は知らなかったものの、「の」「んだ」「ました」のような日本語のモダリティ表現が伝えるニュアンスを、エスペラント

で表現できないことを悩んでいた時期があった。

- 34 井出、前掲書、p.213。
- 35 「ふくらはぎ」は全体としてはかなり客観的で、自らが死んだあとの周囲の様子を冷静ないし冷徹に描写しているが、「線香ってこんなにいい匂いだったのか」「もっとしつこく触っておけばよかったなあ／あのひとふくらはぎに」という最後の二行で主観が出てきている。作者は客観的な語りが、最後に主観的なそれに反転するコントラストの効果を狙ったのかもしれない。「しぬまえに…」もまたかなり客観的な口調で、「ふくらはぎ」よりもさらにモダリティ表現が少ないが、この詩では、感情をあえて抑えることでかえって、「わたしのいちばんすきなひと」への思いが強調されているようである。
- 36 このあたりに、エスペラントを本当に実証的に研究しようとした場合の面白さと、困難さが同居しているように思われる。つまり、理論的に記述されているエスペラントは、5. で少し触れるようにかなりヨーロッパ的であるが、実際のエスペランティストたちはさまざまな言語文化に属し、特定の言語文化を背景としている人々には、場合によっては日本的な発想を直訳したエスペラントでも、かなり理解を得ることもありうる（ただし、エスペラントで詩を論じたり書いたりする人は、かなりヨーロッパ的なエスペラントを見つけてしまっていることが予想される）。しかしこのようなエスペラント（共同体）の、世界的規模における実態に迫った研究はほとんどないのが実情である。
- 37 例えば、ピロン、クロード『エスペラント語の位置測定：ヨーロッパ語かアジア語か？』（水野義明訳、名古屋エスペラントセンター、1981年）などはその端的な例である。
- 38 日本文学の翻訳について、「英訳では、(…) 英語国民には非常に分かりやすい作品に」なるのに対し、「エス訳では、各国の風物習慣を尊重するのが、エスペラントの基本的な立場ですし、また、世界中の様々な人々全てに分かりやすい訳し方も容易に定められないので、勢い語学的に忠実な翻訳となる」という考察がある（山川修一『翻訳のコツ』日本エスペラント学会、1975年、p.41）。このような違いには、訳者が英米人か日本人かということも影響しているだろう。
- 39 エスペラントに独自の文化的要因としてここでは一つだけ、この言語が地域共同体を持たないという特性を挙げておきたい。世間一般では、詩は文化との結びつきが強いので、エスペラントで詩は書けないのではないと思われるが、実際には、詩がエスペラント文学でももっとも質が高いとされている。それは詩が小説とは異なり、時間的及び空間的に詳細な舞台設定を必要としないからだという指摘がされている。エスペラントで文学を読む人は、一つの地域共同体には属さず、さまざまな文化的背景を持っているので、そのような人々全員に分かりやすい舞台設定は難しいというわけである。この点は、Richmond, Ian M. “Internationalism and Cultural Specificity in Esperanto Prose Fiction” (In: Richmond, Ian M. [ed.] *Aspects of Internationalism: Language and Culture*. Lanham, University Press of America, 1993, pp.119-132) を参照のこと。